

STAGE 3 文学的文章Ⅱ

解答(P 14 ~ 30)

- ① (ア) 3 (イ) 4 (ウ) 1 (エ) 3

解説

- ① (ア) 傍線部1の後の「おい、恵一……俳句甲子園に行くぞ」というセリフと「今なら……ずうずうしい」というセリフに着目する。ここからは、友人の「恵一」がもつ才能をそのままにしておくにはもったいないため、その才能を俳句甲子園で発揮してほしいと、自分たちの仲間に引き入れたいとする「航太」の姿が読み取れる。
- (イ) 傍線部2の前後を確認する。「恵一」は「航太」が本気で自分を仲間に誘っていることに気づいてはいるものの、俳句甲子園の審査の仕組みに不満があり、自分の俳句を他人に解釈されたくない思いをもっているために、誘いを拒否しようとしている。指を突きつけているのは、その不満や思いを説明する直前であるから、それらをこれから説明しようとするところだと考えることができる。

(ウ) 傍線部3の後を確認する。「航太」は仲間に、作った本人ではわからなかった自身の俳句の良さや解釈を見つけてもらおう体験をして、良い感情を抱いていることが読み取れる。その体験を、「恵一」にもして欲しいと考え、引き下がないことにしていることが読み取れる。

(エ) 「航太」が「恵一」の俳句の才能に嫉妬しつつも、その才能を「航太」や仲間たちと発揮してほしいと仲間に勧誘するものの、拒否される。そこで引き下がらずに賭けをしてでも、「恵一」を自分たちの仲間に引き入れたいとする「航太」の姿を描いている一幕である。「恵一」には……航太が気づかせてやれることだってあるはずだ。」などの記述に見られるように、地の文には「航太」の心情がそのまま描かれている箇所があることにも注意する。

STAGE 7 論述の資料読み取り問題

解答(P 58 ~ 65)

②

- (ア) (例) 二〇一一年の調査で回答した人の割合が最も多かったのは、「美しい自然」で、以降「すぐれた文化や芸術」、「長い伝統と歴史」と続いています。(67字)
- (イ) (例) 最近の日本人は、美しい日本の自然を子孫に残していきたいと願う人が増えたが、その背景には、近年、深刻さが増している自然破壊や環境問題に対する不安があるのではないかとのことです。(88字)

解説

- ② (ア) グラフ1の二〇一一年度の調査結果を見ると、「誇りに思う」と回答した人の割合が最も高いのは、54%の「美しい自然」で、二番目が48%の「すぐれた文化や芸術」、三番目が47%の「長い伝統と歴史」となっている。

(イ) Bさんの発表の中心である「『誇りに思うもの』として『美しい自然』と回答した人の割合が最も高い伸びを示しているのは、美しい日本の自然を子孫に残していきたいという強い願いが反映されたものである」という部分と、Cさんの発表のまとめである「美しい自然を守り、子孫に残したいという人が多くなった背景には、近年、深刻さが増している自然破壊や環境問題に対する不安があるのではないか」という内容とを、うまくつなぎ合わせて書く。

STAGE 5 説明的文章(社会科学)

解答(P 41 ~ 50)

- ① (ア) 2 (イ) 1 (ウ) 4 (エ) 質 (オ) 3 (カ) 2

(キ) (普段は意識されない)日本人に共通した自然を感じる(よ)うな文化。(14字) (ク) 3

解説

- ① (ア) 第二段落目の最後に「と知人は話した」とあるので、この前までが知人が話した内容となる。
- (イ) 「期する」には、「期限を決める」「覚悟する」「期待する」といった意味がある。ただ、「期せずして」と使う場合には「思いがけず」の意味で使われることが多い。
- (ウ) 「げんな」は、何となく疑わしく合点がいかない様子を表す。スイス人は、一座の雰囲気が急に変わったことに合点がいかず、特別な何かがあるのかと思って尋ねたのである。
- (エ) 「感じ方の違い」のことであるが、次の段落に「細かな感受性の質」とある。ここから「質の違い」を導く。
- (オ) 傍線部の中にある「そんな」は、直前の「細かな感受性の質などには現代文化は本当になんの関係もないものになってしまった」という内容を指す。「そんなふうな文化論」と同様の内容である。
- (カ) 「新しい」にあてはまるものを探すと、第四段落に「近代化し合理化した、現代」とある。
- (キ) 「体でつかんでいる」というのは、「意識しなくても、無意識に」という意味である。昔から日本人の間で意識することもなく受けついできた文化を述べたもので、こうした文化が、ふとしたことで現れることがあるのである。
- (ク) 古くから受けついできたものは、体にしみこんでいるために、感じ方はたやすくは変わらないということである。

③ (ア) A 1 B 1 (イ) 灰 (ウ) 3 (エ) 2・3

解説

③ (ア) Aは、直後に「その子細をたづねければ」とあるので、「納得できない、理解できない」ことだとわかる。Bの「あまた」は、数が多いことをいう。

(イ) 「鉢に灰を入れて置きたるけるを」とあるので、鉢に入った「灰」であるとわかる。

(ウ) 「かかる」は、「このような」という意味の指示語である。ここでは、盗人の行動から考える。盗みを働こうとする心を初めてもった、ということの説明している。

(エ) 盗みを働いた者を許し、少しの品を与えたことがまず考えられる。「又優なり」とあるので、まだほかにもあると考える。最後のあるじの言葉に「のちのちにも、さほどに詮尽きん時は、はばかりず来りて言へ」とあり、のちのちも困ったときには面倒を見ようとしていることがわかる。

【口語訳】

あるところに盗人が入ることがあった。主人は起き出して、(盗人が)帰ろうとする所を捕まえてやろうと思って、その道で待ち構えて、障子の破れからのぞいていたが、盗人は物を少しとって袋に入れて、みなはとらず、少しばかりを盗んで帰ろうとするが、下げ棚の上に、鉢に灰を入れておいてあったのを、この盗人は何を思ったのだろうか、(灰を)つかんで食った後、袋に盗んで入れた物を、もとのように置いて帰った。(主人は)待ち構えていたことなので、組み伏せて捕まえてしまった。この盗人の振る舞いは(主人には)理解しがたくて、その詳しい理由をたずねたところ、盗人がいうことには、「私にはもともと盗みの心はありません。この一、二日食べるものがなくて、ど

うしようもなく腹がすいてしまいましたので、はじめてこのような心になって、(盗みに)やってまいったのです。ところが、御棚に麦の粉であると思われる物が手に触りまして、何か食べたいと思っていましたので、つかんで食べましたが、はじめはあまりに飢えた口でしたので、何であるかもわかりません。何度も口にし、初めて灰でございましたことがわかり、その後は食べないようにになりました。食べ物ではない物を食べたのではございますが、これを腹に入れてしまいまして、物の欲しさが止まりました。これを思うと、この飢えに耐えられないので、このようなあるまじき気持ちが出てきてしまいました。灰を食べても簡単に直ってしまいましたことを思いまして、盗んだ物をもとのように戻したのでございます」と言うので、気の毒にも思いがけないことにも思われて、少しばかりの品物を取らせて、帰してやった。「のちのちにも、そのようにどうしようもなくなった時は、遠慮せず来て言いなさい」と言って、常に面倒を見てやった。盗人のこの心は感心なことである。家の主人のあわれむ気持ちもまた、すばらしいことである。